っているのではない。そうではなく、自分の信仰に於いて自覚的にそれらを自分に受容しているのか、ということを徹底的に検証すべきだと言っているのである。ひょっとすると、すべてを無自覚なままで鵜呑みにし、自分の中で観念化したそれを、正しいイエス理解、福音理解、聖書理解としているのではないか、ということである。確かな教えとして教え込まれて、ただ信じ同語反復しているだけのイエス理解ではないかということである。

「聖書にそのように書いてあります」と言うことが、一体何ほどのことになるだろうか。ただ、それほどのことなれば誰でも語れる。「わたしは、神のもとで見たことを話している。しかし、あなたがたは自分の父から聞いたことを行っている」とイエスは言われた（ヨハネ福音書八章三八節）

× ×

だからイエスは言われる。

あなたがたは聞いているとおり、「目には目を、歯には歯を」とモーセの律法（聖書）に命じられている。しかし、わたしは言っておく、悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。……

あなたがたもモーセの律法（聖書）によって聞いているとおり、「隣人を愛し、敵を憎め」と命じられている。しかし、わたしは言っておく、敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたが天の父（神）の子となるためである。父（神）は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しいものにも、正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあろうか。―マタイ福音書五章三八以下―

これら一連のイエスの言葉はだれでも知っている。しかし、この言葉に於いてイエスが何を人々に示しているかということになると、答えはさまざまになる。これらのイエスの言葉をどのように自分に聞くかということは、その人のイエス理解の様子を自分にも他人にも示すことになる。はたして貴方はどのように聞かれるであろうか。

これらの言葉を自我レベルで聞き取る人はとても多い。自我レベルとは、さまざまな自分の外なる世界を見、感じ、考え、言葉で語り、判断して選び行為している「その次元（レベル）」ということである。要するに、日常の自分そのものが自我であり、その次元でものごとを考え語り選び、そうして行為している次元が、所謂自我レベルということである。

私達の生活はそのすべてに於いて自我レベルの営みだといえる。すべては自分の知恵によって生み出され、判断され言葉され、行動されている。先に述べた一般的な倫理と言われていること

も、自我レベルのことである。

先のイエスの言葉をその意味で倫理ととる人は多い。そのとき、これらのイエスの言葉はとても崇高な人間の在り方を説いた言葉となるが、それは「在るべき姿」であり到達すべき理想像となる。

また、このイエスの言葉を、人の限界と惨めな罪人性とを気づかせる為の示しだととる一部の人達がいる。しかしそれは、先にも指摘したとおり、あまりにもルター的な理解であって、それ自体の正否はともかく、イエスの言葉にパウロやルターを読み込んではならない。

とにかく、イエスの言葉を「出来るか、出来ないか」と言う自我レベルで聞いてはならない。赦せるか否か、耐え得るか否か。信じるか否か。善を為し得るか否かではない。これらは言わば人の側の努力であり決定である。イエスのこれらの言葉は、自我から発した言葉ではない。イエスの言葉は自我から発して人間の自我に語りかけているのではない。先の言葉で言えば、「目には目を、歯には歯を」「隣人を愛し、敵を憎め」というレベルは明らかに自我レベルの言葉である。つまり自我に妥当する道理である。だがイエスは「しかし、わたしは言う敵を愛し、奪う者に進んで与えよ」といわれる。これを自我レベルの言葉とすれば、非現実的観念論であり理想主義的倫理になる。何度も言うがイエスは自我レベルでは語っていない。彼が語るときその言葉は、自我を超えたところ、つまり自我を自我たらしめている、命滾る生命の躍動するその促し

によって生じて来る言葉として語られている。それをイエスは「しかしわたしは言う」という表現で示された。「しかし」とは、自我レベルではそういうことになるが、と言うことであろう。「わたしは言う」とは、神の命滾る生命の躍動に於いては、と言うことである。それ故に、そこでの「わたし」とは自我としてのイエスではない。もし、自我としての「わたし」ならば、イエスはモーセと対決することになり、自分をモーセより偉大な者とする鼻もちならない傲慢者となってしまう。そのような者がイエスならば、恐らく民衆は律法学者やパリサイ宗の者たちよりも、一層に嫌悪すべき者としたことだろう。しかし、民衆はイエスに、律法学者先生のようではなく、本当に権威ある者をその言動に垣間見ていたのである。

×　　×

自我レベルでしか、神も律法も言い伝えも、見、聞き、受け教え、判断し、行動が出来なかったパリサイ宗の人々や律法学者たちは、イエスの言動も自我レベルでしか理解できなかった。だから、「モーセの律法では〇〇とあるが、しかし、わたしは言う」とイエスがお語りになると忽ちに、モーセより偉大な者と自分をなす傲慢者。神の律法を冒涜する悪魔的な者、と怒り狂ったのである。

彼らには、イエスが何を見ておられ、何処に立っておられそれ故に、その言葉が何処から出て来て、何を指し示しておいでになるのかということが、悲しくなるほどに皆目(かいもく)分かっていなかっ

たのである。だからこそ、「見ても見ず、聞いて聞かず」とイエスは彼らを悲しまれた。（マタイ十三・十三）

イエスの言葉を聞き、イエスの行いを見るとき、それらの言葉や行いがイエスの何処から生じているのかということに注意せねばならない。

×　　×

本当に聞くということは、それが出て来たところに向かって、その根源を確かに聞くということであり、本当に見るということは、それが生じたところに向かって、その根源を確かに見るということである。イエスの言葉を文字に於いて聞く時、それは形式的な聞き方となる。また、行いを出来事としてだけ見るとき、それは感覚的な見方となる。このような聞き方や見方では、イエスの表面だけを聞き、見たにしかすぎない。

イエスをそのように語らしめ、行わしめた命に迫り、その命を自分の命として自分自身に生きるためには、イエスの言葉が出てきた根源、イエスの行いが生じて来た根源をたしかに聞き、確かに見なくてはならない。この根源の世界をわたしは「事実」と言って来たのである。

×　　×

「事実（リアリティ）」とは誰も否定することが出来ない事柄を言うが、この、誰も否定することが出来な

い事柄としての「事実」は多くはなく、ただの一つだけである。イエスはこの、ただ一つだけの事実を語り、行い、「事実」そのものを生きられた。

「ただ一つだけ」ということで思い出すのは、イエスがあるときマルタとマリヤの姉妹の家に立ち寄られたときの出来事である。聖書は次のように記している。

マリアはイエスの足もとに座って、その話に聞き入っていた。マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたがそばに近寄って来て言った。「イエスさま、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、なんともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」イエスはお答えになった。

「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは善い方を選んだ。それを取り上げてはならない。（ルカ福音書一〇章三八節以下）

イエスがそのために生き、それとなって生きた「事実」が人間存在にとってどれほどの事柄なのかということの一端がこの物語に於いても知ることが出来る。

×　　×

先に「事実」とは誰も否定することが出来ない事柄であると言ったが、そのような「事実」に

人が気づき、その事実に開眼すにるとき、今まで事実と思っていた事柄がその実、事実ではなかったことを「事実」それ自身が気づかせてくれる。先のマルタとマリヤの出来事で言えば、マルタはイエスに接待することが最も大切と思い、そのために専心していた。一方マリヤはイエスが語り示す事柄に自分を向け、イエスの前に座っていた。イエスはマルタの抗議を、あなたは必要でないことに思い悩み、心を乱していると言って愛想無く退けられた。

人は、マリヤもマルタもそれぞれの分に応じて、イエスをこころよく迎えるために接待したのだから、どちらもそれでよいのではないかと思う。しかし、「事実」に立って生きているイエスにとっては、人が生きるということを、そのような常識的で表面的且つ世俗的な世界、つまり、やがては消えて無くなってしまうような事柄の世界で、とらえてはいないのである。

イエスは人が生きるということの根源に、確かな命の世界のたぎりを見、知っておられる。すべてがそこから出て、そこで保持され、そこで完成されて行くその「事実」の世界が、ただ恵みとして一方的にすべての存在の根源に滾る命として躍動し、すべてのそれを、それとして在らしめている事柄を確かに見て、知っておられる。

この「事実」の命のたぎりに開眼した使徒パウロは、「そのすばらしさに、今では他の一切を損失と見ている」と言い、そのために「わたしはすべてを失いましたが、それを塵あくたと見なしています」と歓喜の叫び声をあげている。（ピリピ人への手紙三章七節以下）―パウロの信仰

と生き方については後で学ぶ―

×　　×

この「事実」の世界をイエスは「神の支配」と言われた。「神の支配」を聖書は普通「神の国」と訳されているが、「天の国」ということも同じである。「神の支配」についてはすでに述べてきたが、それは決して静止した場のことではなく、そこへ人が行く処でもない。それは、神の恵みの働きそのものであり、すべての事柄をそのものたらしめる命のたぎりそものことである。それだからこそ、この神の支配の働きを、誰も否定出来ない根源的な事柄としての「事実」であると、わたしは言ったのである。

イエスは「事実」としてのこの「神の支配」の働きを譬えで示された。

神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。（マル

コ福音書四章二六節以下）

神の支配の働きは、神の一方的な恵みとして、人の思いの如何に関わらず命たぎり躍動し貫徹されて行く畏(おそ)るべき根源的な事実なのである。だからこそ、イエスは、「思い悩むな」と言われる。

だから、言っておく、自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな。……空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない、だがあなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値があるものではないか。あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。……今日生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装って下さる。ましてあなたがたにはなおさらのことではないか。信仰の薄い者たちよ。……あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日が自分で思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。（マタイ福音書六章二五節以下）

神の支配の働きは創造し保持し完成する畏敬畏怖(いけいいふ)すべき根源的働きそのものである。だからこ

そ「神の国は、言葉ではなく力（デュナミス）である」と使徒パウロは言った。（コリント四章二〇節）

×　　×

イエスが人に願われたことは「神の支配」の働きに目覚めることである。人が自分の存在の根底に働く神の支配の働きの事実に目覚めるとき、人ははじめて自分自身に成り、自分の人生の意義を知り、安心を得る。そして、人が対人関係の根底に神の支配の働きの事実に目覚める時、はじめて他者の存在の意義を知り、関わりの秘儀に目覚め、関わりに愛を見出すようになる。さらに、人が共同体の根底に働く神の支配の事実に目覚めるとき、すべてを結ぶ命の絆（きずな）を見出す。

イエスは自分の信ずる「宗教」を説いたのではない。ましてや、それへの入信をすすめ、信徒として生きることを説いたのでもない。イエスは、「宗教」も「信仰」も「神殿」も「祭儀」も「文字としての聖書」も超絶している。それらは所詮は現れているものであり、やがては消えてなくなるものである。「肉は何の役にも立たない」（ヨハネ六、六三）とイエスはきっぱりと言われる。「肉」とは人間とそれが生み出す一切のものを意味している。勿論、「この世」にまつわるすべての事を含んでいる。目に見えるどのようなものも自分の存在の根拠として依りかかるな、とイエスは言われる。その意味では、この世をイエスは超絶している。

しかし、この場合大切なことは、この世を超絶しているイエスがどこに立って、この世を超絶しているかという、その場を確りとつかんでいないならば、イエスの超絶は虚無となる。ただの

この世の一切の否定になってしまう。虚無は存在の根拠を無くすことに他ならない。この世をこの世に於いてだけ見るとき、この世は虚無以外のなにものでもない。まさにそれは「暗闇」（ヨハネ一、五）なのである。

イエスの立っている処は「神の支配」が躍動する命滾るそれである。ヨハネ福音書はその冒頭で、じつに格調高くそれを語った。

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光りであった。光りは暗闇の中で輝いている。暗闇は光りを理解しなかった。（ヨハネ福音書一章一節以下）

私はこの言葉を聞くとき、魂と霊とが沸き立ち、肉体が踊るのを覚える。

「神の支配」に与っている自分を覚えるとき、人は「肉」の自分の立場を克服させられる。日常的自我が克服され、神の支配に立たしめられる全く新しい自分を、自分の内に見出すのである。そこから個人を生き、対人関係を生き、共同体性を生きるなら、そこにあるすべての矛盾は消えてなくなるにちがいない。つまり、「命は人間を照らす光り」となり「暗闇の中で輝く」の

である。しかし、「暗闇は光りを理解」せず「世は言（ロゴス）を認めず」「受け入れよう」とはしない。

×　　×

物事には順序というものがある。一を一とし、二を二とすることは当たり前のことである。個人の存在に於いても、対人関係の在り方に於いて、さらに共同体のありかたに於いても決して、「自分」が一ではない。「自分」とは「人自身」ということである。それは、人の思い、考え、努力、が一ではないということである。それは他ならぬ「自我」からはじめてはならないということである。

ここで、注意しなくてはならぬことは、「自我」を否定せよ、と言っているのではない。人が自我を否定するなら、人は人でなくなる。自我を否定し捨てるのでなく、自我を自分の生に於いて一番とせず、自我が二番目であることを、自我の底（てい）の向こう側の「神の支配」に立って深く知り、そこから自我を生きよ、と言うことである。これこそ宗教的な生き方（宗教的実存）の根拠である。

だからこそイエスは言われる。「今、『私はハッキリ見える』と言い張るから、あなたたちは罪を免れないのだ」（ヨハネ福音書九章四一節）「私はハッキリ見えると言い張る」とは、自我を第一におき、そこを自分の生きる確かな拠り処とする態度にほかならない。しかし、それは暗闇（くらやみ）の思考、暗闇（くらやみ）の自己認識である。その生き方には「事実」が無視され、「神の支配」が視野

から欠落している。だからイエスは嘆息しながら言われた。「むしろ、見えなかったならば、罪が無かったのに」[17]と。

人がどのような姿であれ、生きていることは、人に先立つ「神の支配」の働きの事実によるのである。それは、一切を創造し保持し、完成せずにはおかない恵みとしての事実そのものなのである。この根源的な命に人が目覚めるとき、人は自我を拠り所として生きようとしていた自分から解放され自由人となり、まさに人間となる。

苦しみが無くなるのではない。悲しみが無くなるのでもない。不安が消え去るのでもない。そうではなく、神の支配の手の内で苦しませていただき、悲しませていただき、不安を持たせていただくようになるのである。そのとき、不安も悲しみも苦しみも決して、その人は滅ぼすことはない。まさに死んでも生きても神の内の自分なのである。その姿は母の愛情の手の中に抱かれて泣く赤子である。

× ×

イエスは人の足下に躍動している「神の支配」の事実に、私達が開眼することを願われた。

神の支配は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。

また、神の支配は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。高価な真珠を一つ見つけると出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。（マタイ福音書一三章四四節以下）

イエスは「神の支配」を語り、示し、自ら生き、行じられた。その有様は根源的な意味において「自然」だと言える。わたしはそれを「神の創造に於ける自然」と言ったが、事実、イエスの在り様は人間存在の基盤、または根源において、誰にとっても頷ける自然な在り様そのものだった。だからこそ、イエスはどのような権威にも伝統にも依りかかることをせず、ただ、神の創造に於ける自然、即ち神の支配に促されて生きた。しかもイエスは、それを、対象化して自己の外に立てるのでなく、自己自身がすでにそれに生きているものとして、それを命したのである。その事実を問われたときイエスは「実に、神の支配はあなたがたの中にあるのだとお示しになった。（ルカ福音書一七章二〇節）

八　すべてを包む「事実」

先に、イエスの言葉に使徒パウロの福音理解を読み込んではならないと言ったが、すでに記して来たように、イエスの信仰はイエスの信仰であって、パウロの信仰と混同してはならない。

福音書は、イエスが「神の支配」を伝え、自ら「神の支配」を生きられたことを語っている。これについては、聖書学者ならずとも、すでに福音書を読む者の知るところであり、それだからこそ、先に私もその事実を述べてきたのである。

そのイエスが十字架におかかりになり、葬られた後、復活なさった出来事以後に使徒達を中心とし、パウロを含めた所謂、原始キリスト教団は、「イエスをキリスト（救い主）」として宣教を始めた。このことは使徒言行録やパウロなどの書簡において知ることができる。

×　　×

福音書におけるイエスは「神の支配」を伝え且つ生きられた。一方、書簡などに於ける使徒達は「イエスをキリスト」として伝えた。これらおおまかな二つの信仰態度をどのように理解すればよいのかということ。また、イエスをキリストとして伝えた原始教団のキリスト理解において

も一様でないことなどが、聖書理解において厳密さを求める新約聖書学者たちを悩ましてきた「新約聖書神学の固有の問題」なのである。

×　　×

申すまでもなく、私は聖書学者ではない。およそ「聖書学」というものには全く無知な者であり、伝道者の末席にいる者である。しかし聖書を私なりに読んでいっても、その問題にぶつかってしまう。

こういうことを言い出すと、一部の熱心なキリスト信徒の方々は、それは神の言葉である聖書に対する冒涜的、且つ悪魔的な態度であるといわれるかも知れない。また、それは人間的な知識の為せる結果であって、聖書に対する正しい態度でないと思われるかもしれない。

しかし、この問題は、冒涜的とか悪魔的とか人間的知識によるなどという次元の問題ではなく、単純に「そのようにある」と言う事柄を、ただ「そのようですね」と言ったまでのことで、そこには主義や主張や価値観的な事柄をもちこんではならないと思う。事実を人間の観念で縛ってはならないし、むしろそのような態度こそ、悪魔的な行為を生むことになるのではないだろうか。

×　　×

「聖書のみ」という信仰のをもって、中世のローマカトリック教会の制度とその教義とを批判したのは、皆が知るマルチン・ルターである。彼は、聖書を唯一の権威として信仰の中心に位置

づけ、キリスト教会の改革をした代表的人物であるが、そのルターも「新約聖書の翻訳に従事した際、新約聖書間に矛盾があること、とりわけヤコブの手紙ならびにヘブル人への手紙と、他方、パウロ書簡との間に矛盾があることを発見し、従って、新約聖書の信仰証言の多様性と相互矛盾という事実に直面していた。かかる認識は、一五五二年のルターの翻訳の序説に述べられている」と言われている。―これは堅実な学風の人と評されているW．G．キュンメルの「新約聖書神学」の序に述べられている（日本基督教団出版一六ページ以下）―にもかかわらず、このルターの疑問が何故不問にされてしまったか、そうして、どうして再びこの問題が一八世紀後半以後とりあげられるようになったかということについては、先のキュンメルの書物や他の研究書に見ていただくことにして、それ以上のことは、わたくしが述べる立場ではない。

ここで私が言いたいことは、聖書を唯一の権威として信仰の中心に据えたルターもすでに聖書の教えが抱える矛盾に気づいていたということである。

×　　×

ここで一言断っておくが、たとえ聖書の教えに矛盾があったとしても、わたし自身においては聖書の尊さやその真理性が決して無くなるものではないということである。それよりも、聖書がその文字としての教えに於いて一つのものであるというところに聖書の権威を求め、あえてそこに留まろうとして、一つの教条で福音理解をしようとする態度にこそ、そもそも問題があるので

はないかと思う。　聖書の諸文書間に矛盾なきところに、聖書の真理性を求めるのでなく、矛盾があっても、その矛盾を超えて最も根源的なところに真理性があることを見出すことが出来れば、それこそ、聖書が示す真理性であって、それを厳密な意味で体験的に知ることこそ、聖書が提示する最も大切な「命」なのである。

×　　×

さらにその命は、ただ「キリスト教」又は、ただ「聖書」の世界だけの真理性のことがらでなく、おおよそ「無神論」か「有神論」か、「キリスト教」か「仏教」か、また、「科学」か「宗教」か、さらに「あの世」があるか「この世」だけなのかというような人間の自我の処で論じたり、語ったりして、その真理性を問うている次元、（それが哲学的であろうが、神学的であろうが、一切関係なく）をはるかに越えて、すべての事柄の究極の支点、または根源として、それたらしめている命の働きとしての「命」なのである。これらについては、後で語ることになるが、今はとりあえず、「みちしるべ」九五号に於いて少し記しておいた通りであり、そこを再読していただきたい。従って、わたくしが聖書に於いて見出している真理性は、遂に「キリスト教」が示す真理が勝利するであろう、などという次元の真理性でなく、具体的に人間のエゴイズムが克服され、一切の党派性が無に帰す、その一点の命のたぎりそのものである。

わたくしが問いつづけていることは、正しくその「命」であり、それは同時に、イエスが生きて提示した「事実」としての「神の支配」であり、パウロを含めた原始キリスト教団が示した「復活のキリスト」そのものなのである。[18]

×　　×

パウロを含めた原始キリスト教団の信仰理解の提示の仕方を考える前に、上に述べたことのついでに、もうすこし私が問いつづけてきている態度とその結論的なことを述べておこう。

わたしは聖書の言葉（文字）を自分が生きる最後の拠り所とはしない。なぜなら、聖書の尊さは、聖書の文字にあるのでなく、その文字をとおして示されている真理性にあるからだ。聖書の文字を権威化すると、すでに述べてきたとおり律法学者やパリサイ宗の者たちのような、教条と独善と偽善におちてしまう。やたら聖書の言葉（文字）を振り回して自分も相手もその文字で縛ろうとする。そして聖書の言葉を振り回している限りに於いて安心し、少しでもそれ以外の言葉で聖書の真理性や信仰の表現に出会うと、忽ち不安になり、聖書の教えが汚されたかのように反撃し、それをあたかも、悪魔の言葉のように拒否する。

イエスは、聖書（旧約聖書）を権威化しなかった。それどころか、「モーセは旧約聖書で○○と語っているが、しかし、わたしは言う……」と言って聖書の言葉を批判するかのような言動をなされた。それゆえにイエスは「悪魔の頭」[19]のように思われ、神の敵として拒否され十字架刑に

より惨殺された。

イエスは聖書に書いてあるから、それが真実なのだとは言わなかった。イエスが語ったことは、聖書に書いてあろうがなかろうが、それとは関係なく真実は真実なのであり、その真実が聖書に文字として記されてあるのだ、と言ったのである。

聖書の文字を絶対化し、そこを最後の拠り所としている律法学者やパリサイ宗の熱心な信仰人達は、律法（聖書）の文字をそのまま遵守しなかったイエスの言動を、律法を冒涜する者、神に敵対する者、不信仰者、の代表、悪魔の頭であると決めつけた。しかし、イエスは、

「わたしが来たのは律法や予言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためでなく、完成するためである」（マタイ福音書五章一七節以下）

それどころか、つづけてイエスはつぎのように言われた。

「はっきり言っておく、すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない」と。

× ×

イエスほど深い意味で律法を大切になされた方はいない。それは、律法がどこから出てきて、なにを指し示し、文字の根源で躍動している真理性が、一体どれほどに尊く、聖く偉大な命のたぎりであるかを、律法に見且つ、触れ、知っておられたのである。そのようなイエスから律法学

者やパイサイ宗の人々を見るとき、彼らの言動は、見るべき事実を律法に見ることなく、また聞くべき事実を律法に聞くことなく、やたら律法の文字を振り回して、生活を教条に適応することや文字の解釈に明け暮れ、そのレベルで信仰の当否を自分にも他人にもなし、自分を誇り、他人を蔑んでいる姿は、どう見ても独善であり偽善であるとしか思えなかった。[20]

このような彼等の聖書（律法）理解と生き方をイエスは許せなかったのではなく、情け無く、また悲しくなられた。そのイエスの悲痛な叫び声が、マタイ福音書二三章に響き渡っている。

なんたる悲しさよ、あなたがた。律法学者やパリサイ人達は偽善者だ。（一三節以下）

×　　×

すでに述べて来たごとく、イエスは目に見える世界の根底に、それたらしめている目に見えない根源的な命の働きを、つかみ、自らそれを命（いのち）しておられた。

だから、人は自分が自分をたてる以前に、人は既に自分としてたたしめられている者であり、自分が人と関わることで対人関係が生ずるのでなく、人ははじめから対人関係に生きるようにあらしめられている者なのである。また、社会の一員として人がそれに参加することによって共同体が形成されるのでなく、人ははじめから共同体の一員として社会におかれている者なのである。

正にイエスは、人をそのように在らしめる根源的な命を生きられたからこそ、人々はイエスの言葉を自分の根元的な霊で共感したし、時と所を超えて今日の人々の霊にも無条件に共感を覚えさせ、イエスが生きたごとくに、人間の在るべき在り方へと促すのである。

この場合注意しなくてはならぬことは、イエス自身が、その命なのではなく、イエスはその命を生きた者であるということ。つまり、イエスが直接にその命なのではないということである。「わたしと父（神）は一つである。」とか、「わたしを見たものは父（神）を見たのである。」とイエスは言われたが、そこでの「わたし」とは歴史的な存在としての「イエス」そのものではない。それは、イエスをイエスとして生かし成らしめている命のたぎりそのもの、即ち「ロゴス」（キリスト）なのである。このことを、ヨハネ福音書は次のように語っている。

初めに言があった。言は神とともにあった。言は神であった。この言は初めに神とともにあった。万物は言によって成った。成ったもので言によらずになったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光りであった。光りは闇の中に輝いている。闇は光りを理解しなかった。……言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父（神）のひとり子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。（ヨハネ福音書一章一節以下）

しかし、イエスの言葉を聞いたパリサイ宗の人々や律法学者達は、イエスが言われる「わたし」を「神」と直接同一化した「わたし」であるとして受け取ってしまった。それ故に、イエスを神を冒涜する律法違反者として石打の極刑に及ぼうとした。

わたしと父（神）とは一つである。……ユダヤ人たちは、イエスを石で打ち殺そうとして、また石をとりあげた。イエスは言われた。「わたしは、父（神）が与えてくださった多くの善い業をあなたたちに示した。その中のどの業のためにわたしを石で打ち殺そうとするのか。ユダヤ人たちは答えた。「善い業のことで石で打ち殺すのではない。神を冒涜したからだ。あなたは人間なのに、自分を神としているからだ」……。（ヨハネ福音書一〇章二二節以下）

わたしたちが、イエスの生き様に人間の在り様を見て、そこに人間の救済を頂くのは、決して歴史的に存在したイエスの肉体的な直接性に於いてではない。世の中には今も昔もイエスの生き様を見て感動し、そこに自分の生きる模範や規範、拠り所を求める信仰者やヒューマニストは多い。しかしそれはイエスが私達に提示していることではない。そのような目に見える姿のみにイエスの「わたし」を見るならば、そのような生き方をしている者はイエス以外にも多くおり、イエスが殊更に語られる必要は無用なこととなる。そのような意味からでも、歴史的なイエスに直

接的に「神」を結びつけることは、パリサイ宗の人や律法学者たちの裏返しの意味で、誤りをおかすことになる。

×　　×

イエスが言われる「わたし」とは、「万物がこれによって成った」根源的な命のことである。正に「神の支配」の「事実」のそれなのである。その意味でイエスが生きる「わたし」は、特定の宗教が語るその救済の世界のことでなく、宗教が語っても語らなくても、また人間の智恵が認めても認めなくても関係なく、初めから在り続ける栄光の命そのもののことなのである。

×　　×

イエスこそ唯一の救い主（キリスト）であると信ずる宗教が「キリスト教」として、ローマの世界に定着して以来、歴史的にカトリック教会からプロテスタント教会に受け継がれて、現代の「キリスト教会」に到っているのが、所謂キリスト教の主流である。

その教えの内容について聖書は、イエスが人間の罪のため十字架にかかって死なれたこと、―このことを贖罪という―そして墓に葬られた後三日して復活なされ、神のもとにのぼられたと証言している。この、イエスの贖罪の死と復活とが人間のただひとつの永遠的な救いの根拠であり、このイエスによってのみ、神は御自身を人にあらわし―これを神の啓示という―人はイエスにおいてのみ神を知ることが出来ると教える。そしてイエスに於いて起こった出来事を「福音」と言い、それを宣べ伝える業を「福音宣教」と「キリスト教会」は言っている。

×　　×

以上のように語るのは、決して善悪、当否の思いを込めてのことではなく、ただ、その事柄を述べただけにすぎない。

×　　×

しかし、そのような「キリスト教会」の信仰に生きて来た一人として、その信仰の在り方に素朴な疑問と反省とを持ったのが、今から二〇年程前のことである。

素朴な疑問と反省というのは、イエスに於いてだけ、神さまは御自分を啓示（あらわ）され、イエスにおいてだけ、人が神を知ることが出来るということ、また、そのイエスをキリスト（救い主）と信ずることによってのみ、人は永遠の救いにあずかることが出来るという、教えだけが真理であるということは、一体どういうことなのだろうか、ということであった。

ここで、誤解がないように断っておくが、このような疑問と反省は、イエスをキリストと信ずる信仰において得、且つ知る「救い」という事柄そのものについての疑問ではなく、キリスト教によってだけ、という教え、つまり、キリスト教の唯一絶対性という在り方についての疑問と反省であったということである。

×　　×

このような素朴な疑問と反省とは、少し、ものごとを手の上に乗せて見つめることができる人な

れば、だれでもがいだく疑問であり、反省ではないだろうか。特に、キリスト教の伝統が強いヨーロッパ的な精神的風土とは異なり、神道や仏教、更に儒教などの宗教がそれほどの軋轢(あつれき)もなく併存している日本の精神風土に生きている私達の素朴な思いに於いては、キリスト教の唯一絶対性という真理を掲げた宗教の在り方はそのままで、独善的であり且つ排他的であるとしか思えないのではないだろうか。

ここでもう一度断っておくが、以上のような素朴な疑問と反省は、聖書の真理性とかイエスの真実性、または、それによって人間に提示される救いということがらについての疑問ではなく、キリスト教が表出する真理性の提示の仕方そのものについての疑問と反省なのである。

ここで、問題を先取りして言えば、はたして、イエスが提示した真理性と人間の救済という福音（喜ばしい知らせ）の命そのものに於いては、「わたし以外のすべてのものは真理ではなく、救いももたらさない」というようなものではないのではあるまいか。そのような聖書の真理性の理解には、根本的な思い違いがあるのではないか、ということである。

×　　×

キリスト教会はこれまで、一貫して、われわれこそ最も正しい宗教であり、この宗教信仰以外に人間の救いも世界の救いもないのだという立場をとって来た。—勿論歴史的にはキリスト教会内において、ローマカトリシズムとプロテスタンティズムとの争いはあったが—そして、宗教学

的にも最も発達した宗教の在り方こそ「キリスト教」であり、それ以外の宗教は、未だ低次元の宗教、又は、誤った在り方だという幻想を、今世紀初めにいたるまでキリスト教会はもっていた。従って、そのように信ずる教会のキリスト教宣教は、唯一正しい宗教である「キリスト教」に世界の人々を「悔い改めさせて」招きいれることであった。それは、あたかも全世界の人々を「洋服」に着せ替えさせるような姿勢であったように思う。

×　　×

自分の宗教の唯一・絶対性を主張することは、他の宗教や主義主張を否定することになる。しかし、もし他の宗教や主義主張がキリスト教を受け入れなければ、それらの間で争いが起こることになる。事実、数々の争いがそのために起き、おおくの人間の血がながされて来たことは歴史に見るところである。

×　　×

しかし、わたしはかつて、この紙面で一九六二年以降地球は「和の時代」に入ったと記したことがあるが、それ以後に東西の冷戦体制が崩れはじめた。東西ベルリンの壁の崩壊はその象徴である。確かに、今日、政治や経済、科学、その他のあらゆる分野に於いて、一国だけの主義や利益を主張し追求しては、その国その事柄が成り立たない相補と共生の時代に地球は到っている。このような相補と共生ということが「愛」というならばそのような「愛」の在り方に最も早く、

且つ、根源的に人間の在り方として目覚めているはずのものが、いわゆる「宗教」でなければならないだろう。にもかかわらず、現実はその正反対であるようにおもわれる。人間の在り方の相補と共生に目覚めることにおいて最も遅れているのは実に「宗教集団」なのである。イスラム教やユダヤ教という歴史的にキリスト教と深いつながりのある宗教集団が起こす、悲惨な争いをはじめ、さまざまな小さな教団の間にはびこる果てしない自己主張と陰湿な独善と俳他性、そこに起こる馬鹿らしいとしか言えない出来事にこころある者のだれもが、一体どうなっているのかと憂える。

×　　×

宗教に対する信仰は、個人に於ける選択と決断であり、その意味ではその個人にとっては生き方として唯一絶対的な価値を持っている。しかし、その唯一絶対性は、自分以外の生き方としての宗教を否定することではない。この場合の「自分以外の生き方としての宗教を否定することではない」という意味は、他の宗教に対して寛容でなければならないとか、その宗教に真理性を見ても、そこに価値を全く認めない、とかいうことではない。また、他の宗教にも真理性と救いとを認めるけれども、それらの価値は、イエスによる贖罪、即ち、十字架による罪の贖いの結果による神の恵みの内にあってのことである、などという類のものではない。

このような寛容的態度で他の真面目な宗教を見ているキリスト者はとても多いように思う。こ

のような人達や教団は、ある程度までは寛容であっても、自分が持つ教義の中心に触れると、忽ちその独善と排他的、且つ攻撃的な表情と態度に豹変し、外に向かって自分の生き方の唯一絶対性をヒステリックに叫び出し、ときとして、最も冷酷な者となり、自分の宗教信仰をまもることが、神に喜ばれることだと考える。結局、こうして憎しみは消え去らず、独善と俳他、傲慢と軽蔑による争いは互いに消えることはない。

×　　×

聖書を通して、イエスの宗教理解つまり神理解と、信仰を見ていると、この世に顕れたすべての根原に、根拠としての命滾る真理そのもの即ちロゴスを見ておいでになり、だからこそ、私達が、そこから見ること、そこから語ること、そこに自分を立たしめること、また、そこに既に自分自身を含めたこの世のすべてが恵みとして立たしめられているという、当たり前の事実に目覚めてほしいと願われたことが分かる。その時、イエスの十字架の贖罪ということも、根源的な根拠からこの世に顕れた真理性の表出の一つであることに気づき、それ自身自分に有り難く頂けることになるのである。この根源的な事実に開眼した者は決して、十字架を唯一絶対の真理とすることにより、それで直接的に自他を統一しようなどとはしなくなるだろう。

×　　×

イエスは、この世に現れたすべてのものの根源に根拠として命滾る真理そのものを見ておいで

になった。命滾る真理そのものをイエスは「神の国」つまり「神の支配」と言われ、ヨハネ福音書に於いては「言」即ち「ロゴス」と、言い表されている。そして、このロゴスが後にキリストとよばれるようになった。

ヨハネ福音書は次のような言葉で始まる。

初めに言「（ロゴス）があった。言（ロゴス）は神とともにあった。言（ロゴス）は神であった。この言（ロゴス）は初めに神と共にあった。万物は言（ロゴス）によって成った。成ったもので、言（ロゴス）によらずに成ったものは何一つなかった。言（ロゴス）の内に命があった。この命は人間を照らす光りであった。光りは暗闇の中で輝いている。暗闇は光りを理解しなかった。（ヨハネ福音書一章一節～五節）

×　　×

私はこのロゴスの事実を、創造に於ける人間の自然とか、創造に於ける自然、または命滾る世界、さらに、事実または根源的事実などと言い表してきたが、それらは、決して人間の側から生み出され、考え出され、措定された理念とか観念ではない。

イエスが提示される神の支配、ヨハネが言うロゴスというものは、どのような意味においても対象化される実体ではないし、ましてや観念的な作業によって措定された何かでもない。そのようなものは自我が生み出す幻想にしかすぎない。哲学とよばれるものはときとしてそのような作

業の一つとなりかねない。

×　　×

私にとって神は信ずる対象ではない。私は神の命を生かされている者なのである。神を自我の観念の作業で対象的に措定し、措定した神を観念で構築して、それを自我に受け入れ信じているのではない。このことは既にフォイヘルバッハがその幻想性を「神学は人間学である」と鋭く突きつけたとおりである。

確かに私達は自我の世界で神を構築する。その作業は言葉でなされ文字で表現される。教義とよばれるのがその一つである。そこにはそれなりの論理性があって私達の自我を納得させる。納得した自我はその教義を受け入れ、それを根拠にして一途に生きようとする。私はこのような生き方は自我の信念に生きている者にすぎないと思っているが、それとは知らずに、自分は正しく神に生きているのだと思い込み、信じて疑わない人がいる。このような人達のなかで、常にさまざまな問題が起こって来る。「だまされた」とか「だました」とかいう低次元の欲がらみの問題から特定の「教義を認めない」とか「教義から外れている」とかいう問題、さらにキリスト教の場合なら文字だけの次元での、「聖書的」とか「聖書的でない」とかいう問題。

×　　×

神は言葉や文字を超えている。言葉や文字は人間の自我の世界のことである。何故ならば、言

葉や文字はそれによってすべてを限定し、ときとして、ものごとを固定化してしまう。

つまり文字や言葉で固定化したそれを、本当のそれと思い込み、思い込みによって構築したそれを「事実」だとしてしまう。その結果、本当のそれを見失い、言葉や文字で捕まえ構築したそれをもって、本当のそれをくるんでしまい、くるんでしまったそれを事実だと思い込む。正にそれこそ自我が構築した幻想を事実だと思い込んでいるにしかすぎない。

この一点について、私にはひとつの強烈な体験があり、そのときの悔い改めをとおして、わたしの自我は叩きつぶされた。

×　　×

それは、新築間もない教会堂の二階の部屋で読書をしていた私は、少し疲れを感じて窓の方を頭にして上向き、ゆっくりと横たわった。窓からは、少し離れて庭にあるヒマラヤシーダーの梢が見え、その先の青空には秋らしい雲が浮かび、すべてが爽やかな風光につつまれていた。私はそれらを眺めるでもなく心地よく感じている間に、どうしたことか、私はヒマラヤシーダーと一つになり、さらに雲とも一つになって、大空に溶け込んでしまったのである。それが、どれほどの時間であったのか、全くわからない。ただ自分を自覚したとき、私の口に自然に出てきた言葉は、「わたしは、まちがっていた」という、深い深い悔い改めであった。勿論、悔い改めといっても、そのときの自分を後から振り返っての反省的な語りであって、その瞬間には、悔い改めよ

うと思って自覚的に語ったのではない。気がついたら語っていたのである。

この二階での出来事は、私は誰にもすぐには語らなかった。それは、語ってはいけないと思ったからではなく、語る気が全くしなかったからである。しかし、それ以来、その出来事自体が、わたしの生活のすべての時と場に於いて語りかけ、問いとなり、支えともなっていった。

×　　×

いったい、この出来事は何だったのだろうか。何をわたしに語りかけ、私は何をそこから聞くことが出来るのだろう。そして、「わたしは間違っていた」と言う、その「まちがい」とは何なのか。わたしは、出来事が語る秘密を聞きだすことがわたしの生活となって行った。とはいえ、決してそればかり考え、尋ねているというのではなく、わたしの求道の最も深いところにそれがある、ということである。その出来事から一八年になる。出来事は一時のことである。しかし出来事を通して、私に示され、私がいただいた事実は、いつも私をわたしに戻してくれる。それ以後、現象的に違った出来事を何度か体験してきたが、私にとってそれらの出来事の意味はやはり同じであり、むしろ、先の出来事の意味することを補完し、その確かさを確認させてくれるようなことにすぎない。

×　　×

「わたしは、まちがっていた」というその間違いとはなんだったのだろうか。その後、わたし

自身に少しずつ見えてきたことは次のとおりである。

結輪を先に言えば、日常的な私の自我が脱落して、真実の自己（わたし）が素直に現成することによって、日常的な私の自我で物事をとらえて生きていた自分の生き方の「まちがい」ということである。

かつて私は、自分という者がいて、ヒマラヤシーダーという樹を見、雲も空も見ていた。つまり、私は、樹を樹とし、雲を雲とし、空を空とし個々に対象化して見ていたのである。だから、私は、ヒマラヤシーダーという樹と雲という物、空というものが、私自身も含めて別々にあると思っていた。そして、これこそが本当に在るということなのだと信じて疑わなかった。このように信じて疑わない自分が日常的な自我ということなのである。

しかし、二階での出来事は、日常的な自我としての私が見ているそれは、実は、本当の在るということではなく、自我が自分勝手に思い込んでいる見方であって、本当の在り方というものは、私もヒマラヤシーダーという樹も、雲も空も「一つのこと」であって、突き詰めていくと実は何も無いのだということである。勿論ここで「何も無い」ということは、「すべてが、すべてとしてある」というような意味での「何も無い」ということである。（このことについては「私の問いつづけて来たこと」（下）を参照）

×　　×

それ以後、私に明らかになって来たことは、二階での出来事によって示された世界こそイエスが、全身これ指と化して行じられた神の命の事実であり、私はすでに神の事実、即ち、神の命、神の支配を生かされている、有り難き者であったということである。だからこそ、「さいわいだ、こころの貧しい人々は。神の支配はその人のものである。」と提示されたのである。（マタイによる福音書五章三節）

だれでも、自我を超え、素直にイエスの言動に耳を傾けるなら、その人は、見えるものの向こう側に、全てを創造し、保持し、完成へ促す神の命の滾りの内に生かされている自分を見い出し、神の支配の喜びに満ちあふれるだろう。その事実をイエスは「これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである」と言われたのである。（ヨハネによる福音書十五章十二節）

注

(1) 旧約聖書　出エジプト記二十章一節以下
(2) 新約聖書　ヨハネによる福音書三章十一節
(3) 新約聖書　ルカによる福音書十七章二十節
(4) 新約聖書　マタイによる福音書六章二十六節
(5) 旧約聖書　創世記一章一節
(6) 新約聖書　マタイによる福音書七書二十九節
(7) 旧約聖書　三十九巻の最初の五巻(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記)を「モーセの五書」又は「モーセの律法」という。
(8) 新約聖書　マタイによる福音書十一章二十八節
(9) 新約聖書　ヨハネの第一の手紙三章十一節
(10) 新約聖書　ヨハネによる福音書三章一節以下
(11) 新約聖書　マタイによる福音書十二章十四節・二十六章四節
ルカによる福音書十九章四十七節
(12) 新約聖書　マタイによる福音書六章・七章五節・十五章七節・二三章十三節以下

(13) 新約聖書　マタイによる福音書七章二十八節
(14) 新約聖書　マタイによる福音書六章二十六節
(15) 新約聖書　マタイによる福音書五章四十四節
(16) 新約聖書　マタイによる福音書五章三十八節
(17) 新約聖書　ヨハネによる福音書九章四十一節
(18) これは八木誠一氏によるものだが、私自身その見解に共感する。氏の書物から多くの示唆を受けた。
(19) 新約聖書　マタイによる福音書九章三十四節・マルコによる福音書三章二十二節
(20) 新約聖書　マタイによる福音書二十三章一節以下・十五章一節以下

松　下　昌　義
1931年生まれ
左京キリスト教会牧師

「私の問い続けてきたこと」　みちしるべ文庫4
1998年8月1日　第3版

著　書　松　下　昌　義
発行所　左京キリスト教会
京都市左京区下鴨南茶の木町
印刷所　片桐軽印刷（有）